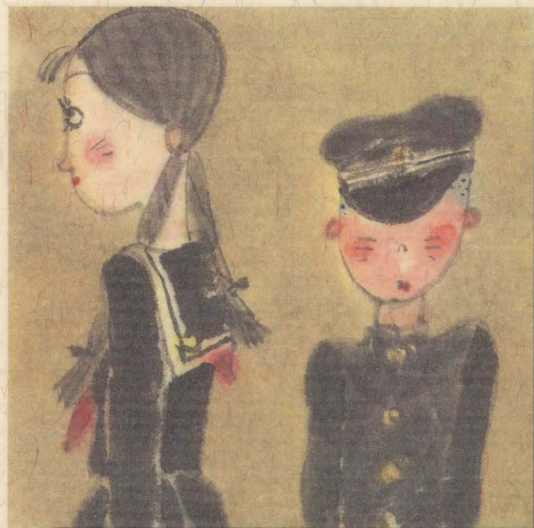


続 続

池部良



そよ風
とき
つよ
を
い
風

そよ風
ときには
つむじ風



池部
良

毎日新聞社

●著者略歴

池部 良

1918年(大正7年),父・鈞^{ひとし}(洋画家),母・童子^{こうこ}(岡本一平の妹)の長男として東京・大森に生まれる。立教大学英文学科卒業後,東宝シナリオライターを経て東宝映画の専属俳優に。「闘魚」他に主演。戦後,復員するとすぐ俳優に復帰,以降,常にスターとして活躍を続ける。また短篇の名手として文筆面での評価も高い。

「青い山脈」「暁の脱走」「雪国」「暗夜行路」「早春」「乾いた花」など約200本の映画,「かの子擦乱」などの舞台,約150本のTVドラマ出演を数える。著作に「寝そべる風」「風が吹いたら」「男の手料理」「久慈見習士官」(日本文芸振興会特別賞受賞)「そよ風ときにはつむじ風」(第11回日本文芸大賞受賞)「風まかせの暦」「そして夢にはじまった」など多数。

続続

そよ風ときにはつむじ風

1994年12月10日 印刷

1994年12月25日 発行

著者 池部良^{いけべりょう}

編集人 吉田俊平

発行人 田中正延

発行所 毎日新聞社

☎100-51 東京都千代田区一ツ橋

☎530-51 大阪市北区梅田

☎802 北九州市小倉北区紺屋町

☎450 名古屋市中村区名駅

印刷/精興社

製本/大口製本

落丁・乱丁本は小社でおとりかえします。

書籍営業部 03-3212-3257/第一図書編集部 03-3212-3239

© RYO IKEBE, Printed in Japan 1994

ISBN4-620-31026-3

目次

とんたか	9
入隊	12
粉雪	15
良殿	18
軍事郵便葉書	21
真つ黒け	24
厠にて	27
弛緩 ^{ちかん}	30
不寝番 ^{ふしんぱん}	33
古年兵殿	36
馬の名前	39
レコか？	42
瑞気	45
もうええ	48

お焦こげ 51

桃花とうか号 54

閣下の書簡 57

屁死へいしのお骨 60

捧ささげ銃つづ 63

東に向けて 66

死んだはず 69

金メダル 72

蚤のみの鳴き声 75

魚拾いい 78

友人「ぴよこたん」 81

れんぺいきゆう 84

草鞋 87

寸志すんしって奴 90

百円札二枚 93

じゅうこうがい 97

薄謝 100

箆 103

監獄行き 106

針鼠 109

なんだその犬 112

スケッチブック 115

返すよ 118

西瓜 121

やくそく 124

幹部候補生願書 127

時田古年兵殿 130

饅頭 133

戦死します 136

菜ッ葉 139

どうして? 142

大尉殿のお言葉 145

お父さん似 148

おきやがれ 151

突撃一番 154

ひっかけられたおしっこ

157

決着のつく前に 160

笊頭ざるあたま 163

蹄鉄ていてつ 166

とかく世の中は 169

コネ 172

棺桶に 175

ロバート・テイラー 178

大白歯 181

北斗七星 184

髑髏しやれこらべ 187

二等兵に降等 190

虻あぶ 193

観音様 196

歌麿の絵 199

伝単 でんたん 202

塞翁が馬 さいおう 205

樽を担いで 208

晴昊 せいこう 211

陽炎の女 214

特別操縦見習士官 217

転属 220

陸軍少尉 223

事件 226

金銀梅の花 229

X日 232

上海に向かう 235

馬匹搭載 ばひつとうさい 238

競馬 241

形見 244

大尉が手紙を 247

水平線 250

百日紅 さるすべり 253

金平糖三個 こんぺいとう 256

汽笛三声 259

葉脈 263

枕屏風 まくらびょうぶ 266

親孝行 271

まだ六十六 274

手付け金 277

上下うへしたの口 280

屁への臭くささ 283

『青い山脈』外伝 286

震みぞれる日 289

旅館清州 292

喫茶店『浩こういちろ一路』 295

おやじ見学す 298

美術館にて 301

寢床 304

銀側懷中時計 307

鰻うなぎの齒は軋ぎしり 310

月夜つきよ野町 313

あとがき 316

裝幀・挿絵
題字

村上 豊
著者

続
続

そよ風ときにはつむじ風

とんたか

来年（昭和十七年二月一日）には、兵隊に行くことが決まっていたから、開き直りもあつて、島津保次郎監督の脅しと要請に従い俳優をやることにした。

島津監督・演出「闘魚」の不良少年役だった。

その直後、何本かの出演交渉を受けたが、まだ「俳優伎芸証」（国家試験）を受けていないから、出演出来ないというわけで、東宝俳優学校なぞに通ったりして、大方の時間を過ごしていた。自分の出た映画は、撮影所で観たきりだった。何とも鑑賞するに耐え難い顔、姿、演技に、すっかり意気消沈して外に出るのが嫌になった。

九月も終わり頃だったと思う。夕方。

風呂屋から帰って来たおやじが、

「良、居るか」と台所の戸を開けざまにどなり、どどつと居間に入って来た。

僕は寝そべっていた顔を持ち上げた。

「おい、起きろ。お前、俺に嘘をついてるな」とおやじは血相を変えて言う。

「ばかやろ。お前、監督になるって言ってたくせに、役者になっちまったそうじゃねえか。俺あ、た

「つた今、風呂屋で、赤つ恥を搔いた」

「どうして？」と僕。

「お前、トンギョなんて妙な題の映画で、ひでえ不良少年をやつてたつて言うじゃないか」

「トンギョ、じゃないよ。闘う魚、闘魚だよ」

「どっちでもいいが、湯舟の中で、どこかの爺さんが二人、夕方、風呂に来るような怠け者の若いもんが一人。帰りに暖簾を潜つたら、女湯から、ちよいとした細君風の女が二人」

「お父さん、何の話？」

「黙って聞け。床屋の前を通つたら、あの爺と倅が飛び出して来やがつて。そば屋の亀屋の前に来たら、嫁に行つたと思つてたが、まだ行つてねえ、その娘が、俺の前に立ちはだかりやがつてだ」

「どうしたの？」

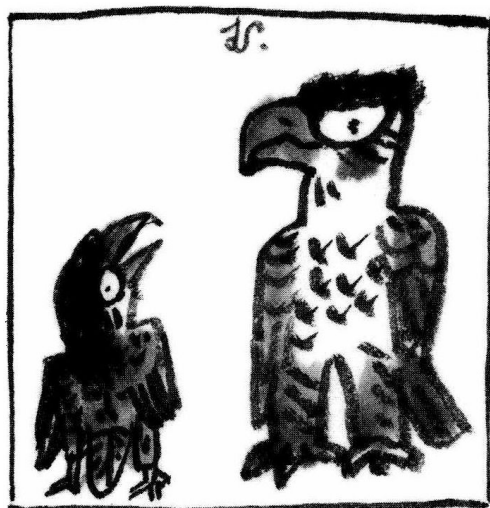
「それがだ。みんな台詞は違うが、搔い摘んで言うと、闘魚つていい映画を観たが、先生の息子さんが映画俳優になつていたとは驚きだ。芝居は、出たてだから、ちよいと危なっかしいが、凄え美男子だから、近い将来、大スターになるに違いない、つて言うわけだ。その後がいけねえ」

「何が？」

「とんたか、だつて言うじゃねえか」

「とんたか？」

「鳶が鷹を生む、つてことだ。お前、監督になるつてえから、黙つていたが、役者になるなんて一言も言わねえから、俺あ、ひでえ、恥を搔いて、とんたか、なんて言われちまつたんだ。嘘つかねえ



で、監督をやつてれば、たかどん、だったわけで恥を掻かねえで、済んだんだ。立ったままのおやじは濡れ手拭いをぶら下げ、一気にしゃべった。

そこへ、おふくろが、どんぶりに盛った「揚げ出し」を持って入って来て、お膳に置いた。

「聞こえてましたよ。実を言うかね」と言った。

「この春、越して来た斜向かいの野々村さんのお嫁さんに誘われて、良の出ている映画を観て来ました」

「観た？ お前が、か？」

「お嫁さんのお名前、朋子さんって言うんですって。

その朋子さんが、さすが、おばさまのお子さんね、

良さんは、って言うの」

「それが、どうしたってんだ」

「男の子は母親に似るって言いますものね。おばさまみたいな、鷹のように立派で美しい鳥から、それ以上に、きれいで男々しい鳥が生まれた、ってことですわ。とんたかつてよくありますが、良さんの場合は、たかわし、ですわね、ですって」

おやじは「ばかやろ」を言い残して出て行った。

入隊

昭和十七年一月三十一日。

東宝砦撮影所。第一ステージ。夜の十時半頃。島津保次郎監督作品「緑の大地」の、中国人に扮した僕と草鹿民子君とのラブシーン撮影を終えた。ステージ内に置かれたテーブルに広げられた日章旗に、島津監督、高峰秀子、入江たか子、高田稔、藤田進、原節子の諸先輩方が、日の丸の周りにサインをし、元気でな、とか又会ってお仕事したいわね、とかの声をかけられ、畳んで持たせてくれた。大森の家に着いたのが、十一時過ぎ。

「床屋のじいさん、起こしてある。坊主にしてもらって来い」とおやじに言われ、台所に踏みこんだ足で、回れ、右をして床屋へ行った。

床屋のじいさんは、一言、「お国のためだ。天皇陛下の御ためだ。頼んますよ」と言った。じいさんは隣組長だから、それ以外の言葉を知らない。

ハッカを塗ったように、すうすうする丸坊主の頭を、冷たい空気に晒らして家に戻ったら柱時計が、十二時三分を指していた。

召集令状に、二月一日、午前六時、東部十七部隊二入隊スベシと書いてあるから、後数時間で、入

當時間になる。

五十燭の電球が、ぶら下がっている茶の間で、僕の壮行会が始まった。いつもと変わらない家族四人が雁首を揃えて食卓を囲んだ。

おふくろも弟も僕も黙々とし、おやじが時々、冗舌になったり、無口になったりして、変な時間と空間の歪みが出来た。

僕は座布団を降りて、

「お父さん、お母さん、永い間、お世話になりました。行つて来ます。お元氣にして下さい」と生まれて初めての紋切り型の挨拶をした。「ばかやろ。嫁入りするんじやあるまいし、下手な挨拶なんかするな。ま、何の乾杯だかわからねえが、ま、乾杯とするか」とおやじは徳利の冷酒を、僕の盃に注いでくれた。

「お酒なら、まだ四本あるわよ。お向かいの朋子さんから配給のを、分けて頂いてるから」

「ばか。四本ある内の二本は、俺が飲まないで、とつておいたんだ。トモコだかタマゴだか知らねえが、俺だつて苦労してんだ」

「わかつてます。良ちゃん、お母さん、何も言えないから、あたし飲めないけど、お別れの真似ごとでも……」

「お別れ、なんて縁起でもねえこと言うな。ま、とにかく敵が来たら逃げる。弾丸が飛んで来たら除ける。怪我はしようがねえが、死ぬんじやねえぞ。日清戦争のとき、木口小平^{こくへい}つてラッパ手がいたそう^うだ。敵の鉄砲の弾丸に当たつて戦死したが、死んでもラッパを吹き続けたつてえ話があるが、嘘^{うそ}つ

け、だ。死んでどうやってラッパが吹けるんだ。軍隊つてところは、平気で嘘つくところだ。よくよく気をつけろ。しかし、万が一ってこともある。こりあ死ぬな、と思ったとき、天皇陛下万歳なんて叫ぶな。みつともねえからな。天皇陛下が、お前を学校に入れたり、小遣いをくれたわけじゃねえんだからな」

おやじは、ここまで息を切らずにしゃべった。時計が四時を打った。

隊は世田谷の駒場にあつたから、品川で山手線に乗り換えた。

電車の中には、同じような坊主頭が五、六人いて、付き添いがそれぞれ十二、三人ほど固まっていた。

渋谷駅で降り、井の頭線に乗ったら、おやじが、僕の前に顔を出し、

「好きな女がいるなら、お母さんにわからねえように、俺に教えておけ」と言った。

電車の窓の外は真っ暗だったが、粉雪がちらついているのが見えた。